

こんにちは。文化財課の児玉です。

いよいよ来週、8月2日から「青森ねぶた祭り」が開催されます。この時期、夕方になると、いろんな所でシャンシャンと音を鳴らしながら、たくさんの「鈴」を浴衣に付けた跳人が集合場所を目指して歩いている様子を見かけます。

ところで、この「鈴」は一体いつ頃から、存在しているのでしょうか。

縄文時代の遺跡からは、「土鈴」と呼ばれる土製品が出土することがあります。基本的に球状の形をしており、空洞の内部には土の玉や小石が入っています。縄文時代中期に集中し、中央高地の山梨・長野両県で数多く出土しており、縄文時代後期から晩期になると東北地方や北海道の遺跡でも出土することがあります。

津軽半島北端にある宇鉄遺跡（外ヶ浜町）から出土した土鈴は、卵形をしており、頂部と底の方に穴があいていて、振ると中の小石が当たって「カラカラ」という音がします。

このように縄文時代の土鈴は、現代の鈴よりも、乳幼児をあやすための「ガラガラ」という音響玩具に近いと思います。

「鈴」が本格的に登場するのは、古墳時代（4～6世紀頃）です。「銅製の鈴」で、丸い形をしており、空洞の内部に銅玉や小石を入れ、細い切込みを入れたもので、中国大陸から朝鮮半島を経てその製作技術が日本へ伝わってきました。しかも様々な種類があり、単体の「銅鈴<sup>どうれい</sup>」のほか、銅製の輪に大きめの鈴を3個付けた「三環鈴<sup>さんかんれい</sup>」、銅製の腕輪に鈴を付けた「鈴釧<sup>すずくしろ</sup>」、銅製の鏡に鈴を付けた「鈴鏡<sup>れいきょう</sup>」は鈴が6個付くと六鈴鏡、8個付くと八鈴鏡と呼ばれます。

青森県では平安時代の遺跡から「土鈴」と「鉄製の鈴」の二種類の鈴が出土しており、土鈴が主体的です。

土鈴は、県内では本市の浪岡地区に集中しており、山元(2)遺跡から46点、高屋敷館遺跡から24点、このほか羽黒平(1)遺跡や野尻(2)遺跡からも数点見つかっています。この時期の土鈴は、縄文時代のものと比べ、より鈴らしくなり、球体の上部には細長い突起がつき、下部にはへら状工具で穴をあけるものや一文字に切込みを入れるものが見られます。

また、鉄製の鈴は、津軽地方に分布しており、羽黒平(1)遺跡（青森市浪岡）、高館遺跡（黒石市）、砂沢平遺跡（大鰐町）、古館遺跡（平川市碓ヶ関）などから出土しています。

これらの鈴は、竪穴建物（住居や工房）からの出土例が多いことから、住人や工人の安全祈願、日常的な祭祀等に使用されたと考えられています。

青森ねぶた祭りで跳人たちが落とす鈴は、幸せを招く鈴として伝えられており、地元の人や観光客のお目当ての一つになっています。鈴を拾うときは、跳人の浴衣からもぎとったり、急に飛び出したりしないよう気を付けながら楽しんでいただければ嬉しいです。